

# 活動拠点

昭和二十九年(一九五四年)の第三回毎日コンペに再挑戦しよう、仲間を募めた。一期下の鴨志田厚子さん、中村次雄君らだ。テーマに選んだ

# 私の履歴書

司 憲 庵 久 栄  
しん けん あん ちく へい

のが積水化学のプラスチックを使った製品で、台所用品の一切を作ってみた。

毎日、一案ずつ考えた。例えば、角を丸くして一粒の米も残らない米びつ、パンがぐにゃつとならないように支えて切るパン切り、汁が外にこ

点。これだけの模型を作るのは大変だから、全部絵で描き、図面をつけて出品した。

この時は学生で初めて特選三席に入った。賞金が二十万円。入選者は新聞に名前が出る。大学の事務長が近寄ってきて私の肩をたたき、「おめでとう。それでたまった学費私えよ」と言った。二年分以上の学費はたまっていた。

## デザイナーの道決意

定期収入「光の自転車」から

鴨志田さんは今は静岡文化芸術大学の生産造形学科長をしている。中村君は卒業後、積水に入り、定年後は千葉工業大学の教授を務めた。

昭和二十九年には広島のお寺を知恩院系のほかのお坊さんに渡して、東京の上石神井に家を建て、そこに母、弟妹と一緒に住むことにした。つまり、インダストリアル・デ

いうことだ。機家の人には「私の教えをデザインを通じて広めたい」とあいさつした。

昭和三十年三月、藝大を卒業した。ある日、自宅に岩崎と柴田が阿佐ヶ谷から自転車で駆けつけてきた。何かと思うと「丸石自転車から話があったぞ」と言う。チャンスだった。自転車業界で自転車を専門家にデザインさせたの

は、これが最初だった。契約の内容は、自転車を新しくすること。当時の自転車はほとんどが真っ黒だったから、仏壇自転車などと呼ばれていた。我々が考えたコンセプトは、「黒という闇は去った。光は帰ってきた」。つまり、空襲警報がなくなったので、闇は去り、光が帰った

と、赤、白、ピンク、グレイ

転車を作った。

カラフルな自転車は多くの女性ユーザーを吸引した。後のことだが、昭和三十八年にパリのルーヴル宮殿で開かれた「世界工業デザイン展」で、「丸石ロードエース号」など三車種が日本から自転車で唯



一推測された。

丸石自転車とはその仕事を機に長期契約が成立、現在も継続していただいている。G Kにとっても大きなステップとなった。丸石自転車からの定期収入に加え、日本楽器の川上源三社長の紹介で、子会

受注していたので、これを基に研究事務所を設置できると思ったのだ。

グループの結束を維持していくには拠点が必要だった。柴田が見つけてきた。新宿区下落合にあった広告会社が倒産した後に、我々が入った。

この広告会社は、藝大の学生を集めて絵のアルバイトをさせていた。加山又造なども描いていた。柴田は国木田独歩の孫で、絵は天才的だった。我々は広告のバイトで才能をムタに使うなど仲間

家主さんは代々の旧家。非常に大きく立派な家で、二階を外国人が借りていたが、最後は我々が全部を借り切る形となった。近隣には安井曾太郎のアトリエなどがあって、閑静な場所である。(インダストリアル・